

<大会開催報告>

初年次教育学会 第8回大会 開催報告

菊地滋夫
明星大学

初年次教育学会第8回大会は、2015年9月3・4日の両日、創立51年目を迎えた明星大学(東京都日野市)において開催されました。大きな混乱もなく、無事に大会を終えることができましたのは、学会員のみなさまのご助力の賜物です。この場をお借りいたしまして、心より御礼申し上げます。

大会への参加者は年々増加傾向にあり、この2年間は400名を上回る参加者がありましたが、第8回大会の参加者は一転して過去最少の365名にとどまりました。原因は定かではありませんが、連日の悪天候に加え、大会の開催日程が他の大規模イベント(たとえば、私立大学情報教育協会「教育改革 ICT 戦略大会」)と重なってしまったことも挙げられるかもしれません。とはいえ、初日の公開シンポジウム「変わる初等中等教育の学びと大学初年次教育」には351名もの参加があり、企画セッションや自由研究発表での活発な意見交換とあわせて、概ね盛況のうちに終えることができましたと思います。

今大会のテーマは「変わる初等中等教育の学びと大学初年次教育」といたしました。高校生までは座学中心の受け身の学習に終始しがちな新入生を、大学にふさわしい主体的な学び手へと移行させることは、初年次教育の重要な目的のひとつです。しかし、中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」(2014年12月22日)に示されましたように、今後数年のうちには大学入学者選抜改革と呼応して学習指導要領も改訂が図られ、大学はアクティブ・ラーニングを軸とした学びをある程度身につけた新入生を迎え入れることとなります。こうした見通しに立ったとき、初年次教育を起点とする大学教育は、これからいかにして「主体性を持って多様な人々と協力して問題を発見し、解を見出していくアクティブ・ラーニング」を推進していくのかが問われることとなります。まさに「変わる初等中等教育の学びと大学初年次教育」をテーマとした公開シンポジウムは、上記答申をまとめられた安西祐一郎氏(独立行政法人日本学術振興会理事長、前中央教育審議会会長)を基調講演にお迎えし、それに続く報告とパネル・ディスカッションでは、小学校と高等学校でアクティブ・ラーニングを組織的に実践しておられる先生方を交えて意見交換を行いました。ここでは、小学校・中学校・高等学校・大学などの学校種を越えた対話と、そうした教育システム全体と社会の対話を継続し、深化させてゆくことの重要性が浮き彫りになりました。詳細につきましては、本誌掲載の記録をご覧ください幸いです。

企画セッションにおきましては、ワークショップ7件(前回大会11件)、ラウンドテーブル5件(同2件)が行われ、学会理事が設定するワークショップは減少傾向にある一方で、学会員が企画するラウンドテーブルは増加するという結果となりました。前者は、各テーマの初学者を主たる対象として、初年次教育に対する知識や実践的スキルを向上させ

ることを目的としたものであり、後者は学会員の自由な情報と意見の交換の場と位置付けられております。したがって、大会の性格が「初年次教育の基礎を学ぶ段階」から次第に「実践を通して得られた知見を共有し、さらに発展させる段階」へと移行しつつある、と見ることもできるかと思われまます。

また、第7回大会より始まった「課題研究セッション」は、今大会では「課題研究シンポジウム」との名称で開催され、「高大接続の新段階における初年次教育の新たな役割と学会への期待」をテーマに、熱のこもった議論が展開されました。自由研究発表は、前回大会と同数の51件があり、実践に基づく幅広い研究が依然として盛んに行われていることを示す結果となりました。賛助会員からは16件のブースが出展され、情報交換が活発に行われていたことも合わせてご報告いたします。

なお、上記「課題研究シンポジウム」の開催日時が、前回大会と同様に他の企画セッション(ワークショップとラウンドテーブル)と重複してしまう点につきましては、次回大会以降への継続課題となりました。日程上の重複を避けるためには、たとえば、第6回大会のように開会期間を3日間とするか、あるいは、(理事会のなかにもひとつのアイデアとしてあったように)ワークショップを大会前日の有料プログラムとして開催するなどの方策が考えられますが、理事会並びに次回開催校におかれましては、引き続きご検討いただきたく存じます。

事前の準備から開催に至るまでは、初年次教育学会の機関会員である明星大学明星教育センター(通称 MEC)の教職員と学生が緊密に連携して対応にあたったほか、学内他部署の職員からも力強い応援があり、過去の大会に劣らず円滑な運営ができたものと思います。さらに、本学の学生たちが、非常に多くの参加者の方々よりお褒めのお言葉をいただきましたことは、まことに喜ばしく、誇らしく思われました。今回の大会は、明星大学の財産が、ひとつには初年次教育への全学的な取り組みを通して固い絆で結ばれた教職協働であり、そして、ともに成長を目指す学生たちであることが再確認されたという意味でも、大変に貴重な機会であったと実感しております。

安永 悟会長をはじめとする学会理事の先生方、学会事務局の先生方、前回大会の開催校である帝塚山大学のみならず、第8回大会実行委員会のみならずからは、数え切れないほどの有益なご助言をいただきました。重ね重ね、御礼申し上げます。次第です。

自由研究発表の座長をお願いした理事の先生方に、発表要旨をお渡しするのが大会前日になってしまったことなど、反省すべき点も多々あります。四国大学で開催される次回の大会がますます充実したものとなるよう、しっかりと引き継ぎを行いたいと思います。

東アフリカで話されているスワヒリ語のことわざに「山と山は出会わないが、人と人は出会う」というものがあります。第9回大会におきましても、それぞれの大学で教育と研究の両面で奮闘しておられる初年次教育学会のみならずが再び出会い、経験と知恵を共有するとともに、いっそう深め合う機会となりますことを祈念いたしまして、第8回大会開催報告の結びとさせていただきます。

(初年次教育学会第8回大会実行委員長)